

## 食と居場所

## —子ども食堂がつなげる未来の地域

民間発の「子ども食堂」の取り組みは全国各地に広がり、既に5千か所を超えているといわれる。一方で、貧困対策の場であるこの誤解もある。子ども食堂の実態とは、どのようなものなのか——。子ども食堂同士をつなげる「むすびえ」を主宰する湯浅誠さんに聞いた。

（認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ理事長）

湯浅 誠さん

聞き手……編集部

—「むすびえ」を立ち上げた経緯と活動内容について教えてください。

**湯浅** 子ども食堂は平成24年に東京都大田区の八百屋さんが始めたのが最初といわれています。その後、急速に増え、平成28年に全国で319か所が確認されています。また、子どもの貧困対策法に関係する一連の動きの中で、子どもの貧困対策の具体例として学習支援などと共に取り上げられています。

子ども食堂には「子どもの貧困対策」と「地域の交流拠点」の2つの機能がありま

す。私たちは平成28年から30年にかけて全国47都道府県を回るツアーを実施して、そのことを周知しました。マスコミにも取り上げられ、子ども食堂に対する注目度が高まり、さまざまな企業さんから支援の申し出が舞い込むようになりましたが、支援の受け皿としては一人事務所の「子ども食堂ネットワーク」があるだけでした。そこで支援申し出の増加に対応するとともに、全国の子ども食堂同士をつないで支援する「むすびえ」を平成30年9月に立ち上げたのです。同年中にNPO法人となり、今年度で4期目を迎えます。活動はプロジェクト

トベースで進めているため、スタッフは一般的な雇用形態ではなく、月数時間の有給など変則的な形で、活動方法は完全にオンラインとなっています。

## ネットワークを広げる

**湯浅** 「むすびえ」の仕事は、子ども食堂の人たちに伴走し、重層的に支援する枠組みをつくることです。小さなボランティア団体が運営し、資金的にも物資的にも余裕がない子ども食堂ですが、数が増えようと都道府県単位のネットワークづくりの機運が

にどんなことでしょうか。

高まるので、いまこれを広げていこうとしているところなんです。また、地方に行くほど少子化は深刻で、地域にとって子どもは未来ですから、企業さんに対して、「未来を作る活動と一緒に参加してください」と呼び掛けています。

ネットワークはいま、47都道府県中41までできました。来年度中には全都道府県に設置する計画です。もしかすると今年度中に達成できるかもしれません。

—ネットワークでつなげる意義は、具体的

**湯浅** 意義は3つあります。1つは「気持ちの交流」です。子ども食堂は規模が小さいので、運営する人は一国一城の主ですが孤立しがちなんです。「次の開催は、いつにしますか」「コロナ禍の中で、やりますか、中止しますか」と、スタッフや参加者からは聞かれるし、トラブルにも対処しなければなりません。そんなとき一人で抱え込むとしんどいですが、運営者同士がオンラインでつながることで気持ちの交流を図れま

—行政との連携はうまくいっているのでしょうか。

**湯浅** コロナ禍がきっかけで連携が進む例が増えていきます。県単位では埼玉、滋賀、奈良、沖縄は、知事が県下の全小学校区に子ども食堂を含む子どもの居場所を作る宣言をしていますし、市町村では神戸市の市長が全小学校区に設置していくと宣言しています。

国のほうでも昨年8月に、第二次補正予算で「支援対象児童等見守り強化事業」を始めました。これはコロナ禍で要保護児童



●プロフィール 湯浅 誠（ゆあさ・まこと）さん  
社会活動家。東京大学先端科学技術研究センター特任教授。認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ理事長。1969年東京都生まれ。東京大学法学部卒。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。1990年代よりホームレス支援に従事し、2009年から足掛け3年間内閣府参与に就任。法政大学教授を経て現職。『反貧困』（岩波新書、2008年、第8回大佛次郎論壇賞、第14回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）など、著書多数。

対策地域協議会の支援対象児童が急増しているとみられる中で、行政が必ずしも対象にリーチできていないため、支援対象となりそうな家庭の子を子ども食堂などが発見したときに、行政につないでもらうというものです。厚生労働省が「子ども食堂」という名前を明記した初めての予算でもあります。

## 地域の人たちの交流拠点

**湯浅** 子ども食堂の認知が広がる一方、「子ども食堂は、子どもの貧困対策の場所である」という誤った認識が強化されてしまうマイナス面も出ています。子ども食堂の8割は、0歳から100歳までの全ての住民に開かれた場所で、地域の交流拠点というのが実態ですから、子どもの貧困対策の場所として見られることには関係者は敏感かつ否定的です。もちろん食堂に来る子の中に経済的に大変な家庭の子がいればサポートするし、それがスタッフの喜びでもあります。が、「貧困対策の場所」というレッテルを貼られると、親も「子ども食堂に行っておいで」と言いつづらくなってしまいます。学校には裕福な家庭の子も経済的に大変

行政が運営するのは難しいのでしょうか。

**湯浅** 行政が子ども食堂を運営するのは、きょう明日でできることはありません。地域の全ての人に開かれているのが子ども食堂の良いところですが、裕福な家庭の子も来られるとなると、「お金持ちの子の食事に、なぜ俺の税金が使われるんだ」と言う人が必ず出てきます。そのときに、「いや、お金持ちの子もそうでない子も一緒に居られる場所だからこそ、あなたの税金が生きてくるんです」と言えないといけないわけで、それには国民的な合意が必要です。

いまの仕組みの中で行政が子ども食堂を運営するには、年齢、属性、所得を限定するしかない。でも、それでは子ども食堂の豊かさは失われてしまいます。現時点では企業さんを含めた民間で理解を広げていくしかなく、国民の理解が3割くらいまで広がれば政策化も可能だと思っています。

私たちはいま、政府に子ども食堂を政策化しないように働きかけています。政策化すると、子ども食堂が第二の学童保育のようになってしまう懸念があるからです。地域のお年寄りや親も来られなくなるかもしれない。これは行政が悪いということでは

な家庭の子も来るし、困っている子がいればサポートもします。でも学校を子どもの貧困対策の場所とは言いませんよね。子ども食堂もそれと同じことです。

—子ども食堂は困っている子も支援するけれど、それ以外の住民さんにも開かれていることで、「予防」にもつながっているということでしょうか。

**湯浅** その通りです。私は長年にわたり貧困対策に関わってきましたが、全財産が数十円しかないような方々と出会う中で、「なんで、もっと早く支援を求めて来なかったんだろう」といつも思っていました。では、彼らがなぜ来ないのかというと、それはハードルが高いからなんです。ここで発想を切り替え、「どういう場所なら行っているのか」と考えればいい。「学校の相談室に行ったら負けだ」と思っているような子でも地域のお祭りには行くのはなぜか。お祭りは自分が大変な状況であると認めなくても行けるからです。

信号機に例えると、支援が必要な家庭の子が赤信号、必要ない家庭の子が青信号ですが、黄信号の家庭の子も大勢いるのです。

なく、行政サービスはその性格上、地域に線引きをしてしまうものだからです。この行政の作法を子ども食堂に持ち込まないようしなければなりません。

実際の子ども食堂は、そういう行政的な理屈や順序を全部すっ飛ばし、有志の人たちの手によって、最も究極的な包括的な場所として続々と誕生しています。しかも短期間に5千か所まで増えるほど、人々の共感を得ている。子ども食堂の運営は行政だと難しいのか、ここに答えがあるのではないでしょうか。

—保健師さんが子ども食堂にもっと関わればいいなと思っています。

**湯浅** 個別には子ども食堂に出入りされている保健師さんはいらっしゃると思いますが、フォーマルな形では厚生労働省がどう判断するかということもあるでしょう。そうすると、まず保健師さんが関わっている具体的な事例を集め、横展開していくことからでしょうか。「まちの保健室」が子ども食堂化しているところはあはるはずなので、それもヒントになるかもしれません。

問題解決は、発見、つなぐ、解決の3ス

そして、子ども食堂は黄信号の子たちが青信号の顔をして来られる場所なんです。一緒にご飯を食べたり、勉強したりして過ごすうちに、「この子はコロッケを食べたことがないんだな」とか、いろいろなことに気づき、そこからサポートにつながります。「まちの保健室」も、これと似たところがあります。カフェみたいな気楽な場所で雑談しているうちに、健康状態だけでなく家族の状況など隠れた課題にも気づくわけですから。

一方、行政の相談支援というのは、基本的に赤信号の人に事後的に対応するもので、専門職が中心になります。相談支援の系列とは別に、地域の居場所を通じて問題にいち早く気づき「予防」につながる系列もあり、これは地域住民が主体で行うものです。いまはこの2系列が軸として成り立つまでには至っていませんが、今後は2つの軸を立てつつ同時にそれらが相互に混ざり合っていくことが求められると思います。

## 子ども食堂の良さを壊さないために

—子ども食堂の運営は民間が主体ですが、

トップが進みます。解決は基本的に行政の仕事で、「気づく」は子ども食堂が得意な分野です。問題は「つなげる」です。つなげるには、制度に通じた人がアセスメントする必要があります、それができる子ども食堂もあります。多くの所ではたぶん荷が重すぎます。「つなぐ」のは、10のうち7くらいを外部の人に担ってもらうくらいがいいし、それは保健師さんの得意分野です。保健師さんが血圧計や体重計を持って子ども食堂に行くのもいいでしょう。ただし、高価なものだめです。子どもがおもちゃにして遊んでいるうちに壊れても、「いいよ、いいよ」と笑って言えるものにしてください。

湯浅誠さんの本



『つながり続ける  
子ども食堂』

中央公論新社  
1,760円(税込み)